# 第5回　グリーフケアシンポジウム

## 死別前後のグリーフケアを考える

# 遺族ケアのための医療と葬儀を考える

［主催］
一般社団法人京都グリーフケア協会
Kyoto Grief Care General Incorporated Association

2019年 7月27日 土
10:30~16:30（受付･開場10:00）

場　所：知恩院 和順会館 和順ホール
〒605-0062
京都府京都市東山区林下町400-2
（地図裏面参照）
定　員：先着 200 名

参加費：4,000 円（税込）
受講対象者：
看護師/助産師/介護士・福祉従事者/
葬儀従事者/その他医療職・対人援助職者

## 第1部 基調講演　10:35~12:00

### 柏木 哲夫 氏

淀川キリスト教病院 名誉ホスピス長
大阪大学名誉教授
ホスピス財団理事長

### テーマ 悲嘆のケア

人生には様々な悲しみがありますが、配偶者や親、子供を失う悲しみは強い悲しみの代表でありましょう。ホスピスという場で約2500名の患者さんを看取りましたが、家族の悲しみはとても深いことがわかります。ホスピスで経験する家族の悲しみは「予期悲嘆」(Anticipatory Grief)と「死別後の悲嘆」(Conventional Grief)に別けられます。前者は患者さんの死を予期して家族が悲しむことで、不治の疾患であることがわかった時点で始まり、患者さんの死で終わります。後者は文字通り患者さんの死後家族が経験する悲しみです。この両者ともケアが必要です。

患者さんの死後家族が立ち直って普通の生活ができるようになるまでにはかなりの時間がかかります。我々の調査では死後一年半経過しても約20％の家族が立ち直れずにいると言う結果でした。この間、同じ体験をした人達とグループで悲しみを分かち合うことができれば回復への助けになります。

患者さんの死後うつ状態になる家族がありますが、それが病的に長引くようであれば、専門家の介入が必要になります。

プロフィール

1965年大阪大学医学部卒業。同大学精神神経科に3年間勤務し、主に心身医学の臨床と研究に従事。その後3年間、ワシントン大学に留学し、アメリカ精神医学の研修を積む。

1972年帰国し、淀川キリスト教病院に精神神経科を開設。翌年日本で初めてのホスピスプログラムをスタート。その後、同病院にて内科医としての研修を受け、1984年にホスピス開設。副院長、ホスピス長を経て、1993年大阪大学人間科学部教授就任（人間行動学講座）。淀川キリスト教病院名誉ホスピス長。大阪大学定年退官後2004年4月より金城学院大学学長。2007年4月より金城学院学院長を兼務。2013年9月より淀川キリスト教病院理事長。2018年9月より相談役。

1994年日米医学功労賞
1998年朝日社会福祉賞
2004年保健文化賞受賞
2016年ヘルシー・ソサイティ賞

＜主な著書＞
「生と死を支える」(朝日選書)
「心をいやす55のメッセージ」(いのちのことば社)
「癒しのユーモア」(三輪書店)
「定本ホスピス・緩和ケア」(青海社)
「いのちに寄り添う」(KKベストセラーズ)
「“死にざま”こそ人生」(朝日新書)
「いのちへのまなざし」(いのちのことば社)
「恵みの軌跡」(いのちのことば社)

## 第2部 パネリストによる講演（各20分×5名）13:10~14:50

## 第3部 パネルディスカッション（パネリストによる）15:10~16:20

※ パネリスト・講演内容は裏面をご確認ください。